

6月25日(日)9時。津山高校の100周年記念館で平成29年度四校連携講座「地域創生学」第1日目が開始されました。

津山地域にはかつて、本校と津山東・津山工業による学校間連携の取組がありました。これは、異なる学科を持つ公立高校が隣接した地域にあるという特徴を生かして、各校の希望生徒が自校にはない他校の教科・科目の授業を受けて単位を認定されるというものでした。その流れを受け継ぐ形で、今年度から津山・津山東・津山工、そして本校の津山市内公立高校が開講したのが四校連携講座「地域創生学」です。

初回の主管校は本校。他の3校の先生達と共に会議を重ねて計画・準備を進め、県教育庁高校教育課の重点事業卒業事業にも認められ、以下の目的・意義のもと開講の運びとなりました。

四校が連携し、地域と連携した多様な学習活動と成果の発表を通して、美作地域の「今」が抱える諸課題を発見する力を育み、発見した課題の解決に向けて行動できる様々な力を有した「将来の地域を担う人材」の育成を目指す。

第1回講座の内容の中で、主管校として力を入れて提案したのが「演劇的手法の導入」です。21世紀に求められるコミュニケーション能力を「価値観の違う他者とも相互理解を深め、折り合える力」と位置づけて、従来から本校で取り組み成果を上げていることを、この講座にも導入したわけです。

・講座の「導入」となる基調講演の講師を劇作家・演出家で演劇教育・コミュニケーション教育の第一人者である平田オリザ先生にお願いします。

・平田先生が指導されている四国学院大学の入試に導入されている「ディスカッションドラマ創作」を取り入れる。

・5日間に亘るディスカッションドラマ創作・上演について、四国学院大学准教授の西村和宏先生に指導を仰ぐ。

以上3点を大枠とし、フィールドワークや出前美作地域の様々な方々の指導・協力を仰いで行う5日間(6月25日・8月1～4日)活動内容が固まりました。

開講式。「高校生達が、演劇の持つ力で津山の未来に一陣の風を吹き渡せてほしい」という私の期待を込めた言葉に続き、県教育庁高校教育課長の竹田先生の御挨拶があり、四校の受講生20名を代表して、本校の渡瀬理子さんが次のような挨拶をしました。

私は、これから受講する地域創生学を通して、地域活性化をするための方法を学びたいと思っています。

現在、岡山県でも少子・高齢化は着々と進んでいます。私の住んでいる地域も高齢化率が約40%になりました。これは全国的にみても高い数値です。

私は将来、県北で中学校教員になり、中学校教育の中で地域の高齢者との交流を積極的に行



い、地域の歴史や課題について知る授業をつくり、次世代を担う人材の育成をすることができる教育を行いたいと思っているので、この講座で教育について詳しく調べたいと思っています。

また、今回の講座では普通科や商業科、工業科、など様々な学科の人たちが集まります。それぞれの学科ならではの学びに触れることができる貴重な機会なので意欲的に意見交換を行い、自分たちの将来に生かせるような経験を積みたいと思います。

ちょっと恥ずかしそうでしたが、受講の目的と意欲がしっかり伝わってきました。

基調講演の演題は「大人は都合よく『学力』という言葉を使う」。

「都合よく『学力』という言葉を使う」大人代表の私は、ドキドキしながら聴いていましたが、大阪大学でのロボット研究者石黒先生との出会いにみる「大学の意義」、知識（量）をはかる日本の従来のテストと異文化理解・合意形成能力を求める PISA 調査の違い、「どのような学びの共同体を作るか」を目指すのが理想の大学入試改革などなど、時代が求める新しい学力の実像を、分かりやすくかつ楽しく伝えてくださいました。

引き続いてのワークショップ。受講生達が積極的に、頭で受け取った基調講演



の内容を、次々に繰り出されるアクティビティによって体全体で深く理解していく様子に心が震えました。

ギャラリーは、講演の聴講希望の四校の生徒達や県内の教育関係者、2日目・3日目の地元講師の方々、そして講座開講に携わった四校の教員です。

準備段階では「『演劇的手法』の実際や効果について、今一つイメージを持ちにくい」という声もありましたが、平田先生のお話とワークショップのすばらしさ、受講生達の真剣に楽しみながら学んでいる姿に、心配は吹き飛んだと思います。

教諭時代の演劇部の指導、さらに演劇的手法を導入した国語指導や総合学習指導の実践で、演劇教育の可能性と成果を体感していた私は、今回の取組の成功は確信していました。が、それを目の当たりにすると共に多くの方々に実感していただける機会となったのが、何より嬉しいことでした。

本校の受講生の感想の一部です。

〇…私は大学とは、小学校から高校まで学んできたことをより詳しく学ぶ場所なのかなと思っていたのですが、平田先生のお話で「学問と学問がせめぎ合って新しいものを生み出すことだ」という言葉で、大学の学びに対する意識が変わりました。また平田先生のワークショップでは、自分の考えていることと相手の考えていることが違うんだという自覚を持って、自分の考えをアウトプットしていくことが大切だと言うことが分かったので、初対面の人ともそうでない人とも、人と接するときはこのことを意識しようと思いました。

○演題を見て「どういうこと？」と思いましたが、平田オリザ先生のお話を聞いているほどと思いました。今までの日本は短期記憶でその時だけ覚えていればよいというテストでしたが、「今ではそれだと将来失業者が増えるようになる」と聞いて、変えていかなければいけないと思いました。

異文化理解能力とは、知らないことを理解する力だと知りました。自分はどうだと思っても相手は自分と同じ意見かどうか分からないので、それを否定するのではなく、理解していかなければならないと思いました。

じゃんけんで決めていいことと10分で決めなければいけないこと、一晩考えなければいけないことを判断できるような大人になりたいと思いました。

文化は衝突しやすく、不合理なものだから、それ(＝自国の文化)をいいに決まっていると決めつけてはいけないなと思いました。

午後のメニューは二つ。一つ目は「津山市の現状と課題、地方創生の取組について」と題された、津山市総合企画部地域創生戦略室長の山田様のお話。以下が感想の一部です。

「…津山の人口が減っているのは、出ていく人が多いからだと思っていたけれど、未婚率の増加や晩婚化が進んでいることも原因にあるんだなと分かった…」 「…商品をブランド化して付加価値を上げて地域活性化につなげるという取組はすごいと思う。…夏休みの地域調査で、ブランド化するまでの経緯や、どうすると売れるのかというお客様の行動などを目で見るために企業に足を運びたいと思った。…」

地域が抱える課題の深刻さ複雑さへの気づきや、課題克服のための可能性を模索しながら、耳を傾けました。

最後は、ディスカッションドラマ創作・上演に向けて5日間を通して指導してくださる演劇の専門家、四国学院大学准教授の西村和宏先生による指導です。

アイスブレイクのフルーツバスケットの後、事前に決められていた3つのドラマ創作グループ毎に、短い「劇」作り課題に挑みます。

最初の課題は、お化け屋敷、誕生日会、授業風景やディズニーランドなどの場面作り。1回目の「何でもあり」から、2回目は「最初は？で、途中で何か分かるよう工夫して」との注文が入ります。受講生達は、今日初めて出会ったのがウソのような親密さで取り組みます。

2つめの課題は「進路をめぐる三者面談の席で、生徒が親に隠していた本当の希望進路を告白する」場面の創作です。東大進学を望む母親は「この成績なら大丈夫！」との先生の言葉に喜びますが、歌舞伎の女形になりたいとの息子の衝撃の告白に仰天…といった奇想天外なドラマが生まれ、場内大爆笑でした。



いよいよディスカッションドラマ課題の発表です。受講生達は、あらかじめ渡されていた『平成29年度四校連携講座『地域創生学』ポートフォリオ』と題された記録ファイル中の袋とじー担当の牧野先生のアイデアの頁をおもむろに開きます。



平成29年度 四校連携講座「地域創生学」課題

以下の題材でディスカッションドラマ（討論劇）を創りましょう。

<ドラマのあらすじ>

政府は、力を入れて取り組んでいる地方創生をもっと進めるため、全国に10カ所「地方創生推進特区」を作ることを決めました。そして、その一つに津山市が選ばれました。

「地方創生推進特区」では、地域を活性化して人口の減少をくいとめるための、その地の特徴を生かした取組を行います。その際に必要な費用は、国が全額負担します。

津山市は、これまで市役所内の総合企画部地域創生戦略室が企画してきた、①観光、②産業振興、③医療・福祉、④教育・文化という四つの津山市活性化「戦略」から、戦略室のスタッフが一つを選び、重点的に取り組むこととしました。しかし、どの「戦略」を推すかの意見は、スタッフの中でもバラバラでした。さらに、四つの「戦略」のそれぞれを推す、様々な立場の地域住民団体や個人が、市役所に陳情に押しかけるようになりました。

津山市は、①から④のうちどの「戦略」を選ぶかを巡って、公開討論会を開催することにしました。

<課題>

- ・公開討論会のディスカッションドラマを創りなさい。

<条件>

- ・フィールドワークや地元講師による出前授業といった調査活動は“「戦略」グループ”毎に行います。
- ・調査活動終了後、あらかじめ決められた三つの“ドラマ創作グループ”に分かれます。
- ・ディスカッションドラマ創作は、以下の要領で行ってください。
 - “ドラマ創作グループ”のキャストの役割は、地域創生戦略室スタッフと担当「戦略」を推す地域の団体や個人とします。
 - 必ず全員が創作グループ内で何かの役に扮してください。役割の内容はグループ内で決めます。
 - 四つの「戦略」それぞれの立場から具体的プランの主張と、他の「戦略」プランについての的確な攻撃を行ってください。
 - 攻撃に対する反論も考えてください。
 - 各「戦略」の具体的プランは“ドラマ創作グループ”で創っていきませんが、①の観光については、津山城の天守閣再建を国の費用負担で行うことが決まっています。
- 他の「戦略」も、国が負担する費用は、天守閣再建の必要経費とほぼ同額までとします。
 - 議論の最中に、妥協案を提案する人などがあってもかまいません。
 - 誰が、どのタイミングで発言すると面白くなるかをよく考えて、発言の順序を決めてください。
- ・完成した3本のディスカッションドラマは、最終日に参観希望者（受講生以外の4校の生徒、この取り組みに協力してくださった地元の方々、県教育委員会関係者、県内の高校の教員、近隣の小中学校の教員・教育関係者等）の前で上演します。

〈条件〉にあるとおり、20人の受講生達は、まず①観光、②産業、③医療・福祉、④教育・文化の「戦略」グループ毎にフィールドワークを行って、各自が「戦略」の専門家になります。その後3つの「創作」グループに分かれて、〈条件〉に基づいてディスカッションドラマ創作→上演を行うわけです。

ここで西村先生から、さきほどの「劇」作りの意図が明かされます。

「最初は結論が分からないようにして、観ているうちに分かってくる」

「ドラマには対立や葛藤があるほうが面白い」

実際に劇を作っている受講生達の中に、西村先生の説明はストンと入ってきます。彼らの「な～るほど」「納得!!」といった心の声が聞こえてきそうでした。

残り4日間の講座は、8月1日から4日まで開講します。「戦略」グループ毎のフィールドワークに、「創作」グループでのディスカッションドラマ創作がそれぞれ1日半。完成した3本のドラマは、最終日の4日午後1時から上演されます。どんなディスカッションドラマが出来上がるのか、ディスカッションドラマ完成までに、一人一人の受講生の日々にどんなドラマが展開するのか、この「地域創生学」というドラマが、各校にそして地域にどんな風を吹き起こすのか…またお知らせしたいと思います!!

生徒達の西村先生の指導後の感想の一部です。彼らがこの時間だけでどれだけ沢山の「学力」を主体的に身に付けたのかが分かります。

○最初の自己紹介からフルーツバスケットで、違う学校の人でも話しかけやすくなったなと感じました。(創作グループの)Bチームで集まって、知っている人知らない人がいたけど、時間制限やお題があって、みんな積極的に話に参加しながらどんなことをするか考えることができました。…次に三者面談を想定して作りました。その頃には、このメンバーの中で演技するのは、もう恥ずかしくなくなっていました。

最終的に、自分たち以外の人の前で発表ということなので緊張するとは思いますが、頑張っで楽しんでいきたいと思っています。

○グループで協力して劇を考えて演じたのが楽しかった。また他の人の発表を観たのが面白くてずっと笑っていた。しかし自分が演じている時に笑ってしまったり、役に入り込めずセリフが棒読みになってしまったので「面白くても自分が演じているときには笑わないようにしましょう」「演じる時はしっかり役に入り込んで、気持ちを込めてセリフを言うようにしましょう」と反省した。

メモを取っていなかった。「しっかり取っておけばよかった…」と反省した。これからは忘れないようにしたい。「今日学んだことを生かして、8月のディスカッションドラマを最高のものにしたい!!」と思った。「最初は分からないけど、途中で何をやっているか分かる劇にしたい」と思った。また「セリフを言うタイミング」にも気をつけて、観てくださる方を引き込みたいと思う。

津山高校、津山東高校、津山工業高校の生徒と協力して頑張っていきたい。

平成29年7月4日